

「覺醒」主幹宮澤英心氏著

四六版七百餘頁
體裁優美箱入

申込殺到

最新刊

宗教革命の根本思想

一名新宗教の建設

定價金參圓五拾錢
送料一部金拾八錢
朝鮮・樺太・臺灣は
書留小包に付

送料金五拾五錢

既成宗教の地雷火

近時教團の各所に宗教の革命を叫ぶ者の現れしは、今や枯死せんとする既成宗教の爲に欣ぶべき現象なり。然れども其の革命意見の内容を一瞥するに、概ね従来の儀式・寛恕とか、僧侶教師の腐敗とか、寺院制度の改革とかの枝葉問題に止まり、宗教の中核たる本尊に觸れたるものを見ざるなり。革命とは之を政治的に言へば、主権者の變革を意味するものなるが故に、宗教の場合も亦その本尊の立替に非ざれば宗教の革命とは稱せざるなり。本書は此の意味に於て世界の各宗教中、殊に基督教の本尊即ち全智全能の神と、久遠の本佛（佛敎各派の本尊を指す）とを拉し來つて現代の科學・哲學・乃至倫理・教育等の立場より、縱橫無盡にその正體を分析解剖し、遂に之をウエルズの所謂「闇黒の實在」として葬り去り、毫も信仰對象たるの資格なき事を論明し、併せて茲に活ける實在の神を高揚し、以て金剛不壞の新宗教を創建せるものなり。今や既成宗教の大立替を要する秋に當り、斯界に本書の出現を見たるは、實に早天に雲霓を見、闇夜に大燈明を得たる如きものなり。傳統的の宗教信仰に行詰れる者、或は既成の教義學說に疑問を有する者よ、須らく本書に來つて多年の大疑問を永解すると共に宗教の新天地を開拓せらるべし

發行所
取次所

大阪市西區新町通一丁目四八
振替口座大阪七〇二二五番
大阪市南區難波芦原町
振替口座大阪一六四八一番

立正屋書房
大日本覺醒團

張主大二のと設建と壊破

目次

次

宗教運動の根本方針……………	野澤悌吾
うゐの奥山今日越えて……………	本多日生
罷睡錄……………	山根日東
法華經要文講義……………	本多日生
記事報導……………	………

第廿八年六月號

統一

宗教運動の根本方針

大正十三年三月三十日統一閣再建落成式に於て

野澤悌吾

從來我が恩師本多日生現下を中心として行つて参りました宗教運動は、色々の方面に亘つて居りまするが、その機關といたしましてはこの統一閣と、自慶會といふものがあるのであります。この二つの機關を通して行はれました宗教運動を大別しますれば高級教化と工場教化の二つになつて居りますが、世の中の變遷と、殊に大地震を経過して展開しつつあるこの世態に鑑みまして、茲に新に低級教化——即ち最も變化に遠ざかり易い所の屋外労働者並に一般民衆を教化する事の必要を感じまして、娯樂と教化の完全なる一致を理想し、此理想を實現する爲の一つの機關として、今度この統一閣の建築が應用せ

られる筈なのであります。私は自慶會の理事として恩師の指導の下に右教化方面の事に努力する事になりましたが、從來高級教化の方面には多少の経験を積んで來たと申しましたが、何分一介武辯の出身でありまして、それさへも極めて不完全であつた事を自覺して居りまするのに、更にこの最も難かしい所の低級教化に従事するといふ事は、實は私の力の許さぬ所でありますけれども、上は恩師の指導に依り又皆様方の御援助に俟ちまして、熱誠を籠めてこの使命を果したいと考へて居ります。どうぞ將來とも宜しく御援助御指導を願ひまする次第であります。扱てこの大切な宗教運動に着手致しまする際に

私が考へて居りますのは、物事は其進行中に於て
 兎角根本の方針を逸したがるものである、故に少く
 とも宗教運動の根本方針から外れる事なく、この仕
 事に従事して見たいと考へまして、今日はその考を
 皆様の前に披瀝し、さうして將來御指導を仰ぐ縁と
 したいと思ひまするので、『宗教運動の根本方針』と
 いふ講題を設けた次第であります。

宗教運動の根本方針としては別に珍らしい事の
 有るべき筈はないので、即ち世を濟ひ人を救ふとい
 ふ事に歸着するのでありますが、現在の思想界の
 状態、人心の傾向に鑑みました時に、人を救ひ世を
 濟ふ上に於て、吾々はどういふ具合に考へて行かな
 ければならぬであらうか、從來の經驗に徴しまして
 私はそこに多少のヒントを與へられて居るのであり
 ます。

なく、又さうした浅い意味のものではないのであり
 ますけれども、單にその競争性に依つてのみ文化の
 進展を考へて行つた際に、彼等の理想する所は全く
 裏切られて、自由を理想して居つたのが却つて不自
 由な社會が出来、平等を理想して居つたのが却つて
 非常な差別の世態を現するに至つたのであります。
 個人主義の失敗に懲りて現在のあらゆる思想は、
 社會を基調として動いて居りまするが、その中には
 デモクラシーあり、或は社會主義あり、或は無政府
 主義がありますけれども、その何れのものも矢張り
 人間を觀るのに悉く浅い意味、偏つた意味に於て觀
 て居ることは事實であります。

即ちデモクラシーは、人は生れながらにして平等
 であるといふ形態上に於ける平等を認めて、それを
 元にして人は人としての權利に於て平等であるとい

今日科學の知識に根據した所の人身觀、即ち人間
 の觀方といふものが、悉く小さな我、即ち小我と
 いふものに執着をして居る、そこから色々主義主張
 が違へられてありますけれども、その小我に執着し
 て居る所に根本の缺陷を持つて居りまして、結局彼
 等が理想する所のその理想は實現することなく、却
 つて世の中は益々鬭争の氣分が濃厚になり、現在の
 如き憂ふべき状態を賣らして居るものと認めるので
 あります。科學の知識が教ふる所に依つて吾々が人
 間といふ者を觀みました際に、各種の主義は何と人
 間を觀て居るでしようか。

個人主義は進化論の所説に依りまして、主として
 人間に競争性のみを認め、さうして文明の進歩はた
 らこの競争性を働かすことに在ると考へて行つたの
 である。人間といふものはさうした單純なものでは

ふ事を肯定し、その平等なる權利を政治上に於て獲
 得するのを名けて政治的デモクラシーと謂ひ、經濟
 上に於て獲得する事を名けて經濟的デモクラシーと
 稱し、文化上に於て獲得する事を名けて文化的デモ
 クラシーと言つて居りまするが、その違ふ所には無
 論色々結構な理想もありますけれども、併ながら
 根柢の人身觀が淺薄偏狹であつて、それに基いて理
 想を實現しやうとして居りまするから、結局その理
 想は裏切られて、現在に於てデモクラシーの本元た
 る亞米利加に於てすら、デモクラシーは空想なりと
 いふ議論までも出て居る次第であります。之を日本
 に移し來りました際に、皆様方が御覽になります
 如く、成程差別的に偏し過ぎたる從來の社會に向つ
 て、一つの反省を與へる力は確かにあつたでありま
 せうが、併ながらそれに伴つて生ずる所の弊害とい

ふものも亦決して小さくはなかつたのであります。更に社會主義に至りましては、全く個人主義と反對の方面に立つて人間の中に社會性を強く認めて居る、即ち人々相寄つて共同の生活を営むといふその社會性の方に重きを置いて人間を見、人々に社會教育を施し、社會的の自覺を興へ、而して個人主義が失敗したる跡に鑑みてその競争を逞しうせしめざる所の社會、即ち共產主義の社會、相互扶助の社會を作つて、その中には等の人々を追込んで行つたならば、そこに平和の社會が出来る、社會の福祉といふものを獲得する事が出来ると斯う考へて居るのである。けれどもそんな淺薄なる人身觀では其理想が實現するものではない。露西亞は命懸けで之を實行しましたけれども、結局、明に失敗の跡を示して居る。即ち一千九百二十二年十月の新しい經濟政策は、確

に共產主義の失敗を示して居るものであつて、彼等は又々資本主義に戻つて行きつゝあるのである。抑も共產主義に依つて人間の競争性を壓へ、それに依つて相互扶助の實を擧げしめようとするのは、既に根本に於て考へ違ひであつて、恰も暗室から暗を汲み出して其室を明るくしよふと考へるのと同様であります。競争性を善い方に働かすことを考へないで之を壓へて見ても、人間の有する他の數多き煩惱は遠慮會釋なく働いて居るのである。即ち人間は忽ち横着性を起して、成べく働かずに平等に食べて行かうといふことになり得るから、露西亞の如きはそれに苦しめられて生産の力が著しく衰へ、饑饉の際などはそれが爲に非常な悲惨の状況を表はすに至つたのであります。

無政府主義の如きも人間に絶對の自由を認めて、

さうしてそこから進んで行かうといふのでありますけれども、是れ亦その結果は推して知るべきものであると思ふのである。

我が佛教の教ふる所は、左様な小我に執着して居るのは迷執であり、妄想であつて、「一切の業障海は皆妄想より生ず」と述べられて居りまするが如くその妄想といふものが本になつて、さうして吾々は諸種の罪業を重ね、その罪惡に満ちたる所の社會は結局闘争に陥る、阿含經の所説に依りまするならば『是故に即ち諍あり』で、階級闘争が激甚に起つて來るといふ事を教へてあるのである。吾々はこの五尺の身体、五十年の壽命と見える所のこの小さな我を中心にして、その内容に縱には三世を貫き、横には十方に互つた所の無限の生命を懷いて居る。即ち私自身を中心にして見ました時に、一切衆生は

我が生命の内容であり、草本土も我が生命の内容である、佛と雖も即ち我が生命の内容であるといふ所まで、深い／＼人間の意味合を教へて、そこに所謂佛性論といふものが成立して行くのであります。

『一切衆生悉有佛性』と申しまする意味合は、即ち我が生命の内容に於て佛を懷いて居る、その外在の佛と見るものは即ち我が内在の佛である、我が本性たるこの内在の佛を見る迄に目が覺めて行かなければ人間の本當の力が出るものでない、一切の徳性は此根本的覺醒に依つてのみ展開する事を教へてあるのである。現在の人々は覺醒々々といふ事を申します、婦人問題に在つては婦人が覺醒したと稱へ、労働問題に在つては労働者が覺醒したと叫び、小作問題に在つては小作人が覺醒したと言つて居りますけれども、併ながらその覺醒がこの佛性まで深く及んで居

らない限りに於ては、それは眞の覺醒でない、結局する所は自己の利益に目覺めて行くといふ事より外ないのである。各々その自己の利益を中心にしてさうしてそこに所謂覺醒を謳ひ、その利益を主張して進んで行つた時に於て、所謂「上下交々利を征りて國危からむ」國家の興亡といふやうな事は眼中から自ら逸してしまひまして、遂に國力はそれが爲に衰え、その反響として民族の繁榮も社會の福祉も共に失はれて行かなければならぬのであります。けれども、現代の人々はこの半端の覺醒の上に立つて將來の危険を殆ど認むる事無く、濃厚なる鬭争を續け終には「奪はずんば廢かす」と云ふ所まで進まんとして居るのは、洵に遺憾な事であります。

人が半端に目の覺めて居る時は却つて間違が多い寧ろ眠つて居るよりも厄介であります。例へば夏の

な狀況が現れて來ると思ふのであります。眞に目覺めて行かうとするには、どうしても人間の本性たる佛性にまで目覺めて行かなければならぬのである。現在の人心の頹廢を救ひ、思想の惡化を匡正して行かうと致しますには、この根本心の覺醒を與へるより外、私共は何等の方法もそこに無いといふことを確信して居る。

この根本心に覺醒を與ふことが即ち人を救ふ所以である、吾々が佛性に目が覺めて行くといふことが、即ち自ら救はるゝ所以である。佛性に目が覺めて行くといふことは即ち一切の道德の流るゝ源泉を鑿つて行くといふことである。人間が感覺的の知識のみに依つて考へて行つた時に、そこに宗教的情操といふものは全く破壊せられてしまふ、現在の人人は科學の智識に心酔しまして、さうして一切のも

頃主人公が非常に酔らつて歸り、室に入つて寢ようと思ふと、そこに蚊帳が下つて居る、是は蚊帳だと思つて内へ這入つて寢轉んでしまつた、眼が覺めて見ると豈圖らんや、暖簾を潜つて中に寢て居つたので非常に蚊に喰はれてしまつた、自分自らもその生はんかの覺醒の爲に非常に損害を受けて行くのである。翌日になると今度は妻君が、どうも内の人はいつても酔つて來るから、今夜は蚊帳と間違はないやうにしてやりたいといふ深切からして、暖簾を外して待つて居つた。すると主人公は相變らず泥酔して歸つて來て、今日こそ間違ふものかといふ譯で、本當の蚊帳をこれが暖簾だといふので之を潜り、この次が蚊帳だと思つて潜つて行く、結局又々蚊帳の外に出てしまつた、これは滑稽の例でありますけれども、半ば目覺めたる人々には結局似たよふ

のを見て行きますから、物の深い意味を味ふことが出來ず、隨つて又物の尊い意味、有り難い意味を味ふことが出來ない。太陽を見ましてもその太陽の前に頭を下げるといふやうな、さうした清らかな尊い情操といふものは、科學の智識では出て來ないのであります。自分の親を見ました所で、親夫婦の結合は單に本能の要求に外ならぬ、一つは即ち經濟生活の必要から、一つは性慾の本能からして親夫婦が結合したものであるといふ点のみを見て行きました際に、そこに親の尊さといふものは到底味へることが出來ないのである。左様にして道義觀念の源といふものが破壊せられて行つた時に、世の中の人心は現在の如く頹廢せざるを得ないのであります。

加之この宗教的情操の燃えて居らない人々は、甚だ言ひ過ぎるかも知れませぬけれども、それは眞

に生きて居る人ではないのである、少くも眞劍に生きて居る人ではないのである。人間は智、情、意の三つを持つて居る。如何に知識が澤山あつても、如何にその感情が高くあつても、如何に意志が鞏固であつても、是が宗教的情操に依つて統一せられて本當に焰を上げて燃え出して来ない限りは、人間は本當の人生の深味を味ひ、人生の強さを味ひ、人生の美しさを味ふ事は出来ないであります。佛教では之を『鬼の波を渡るが如し』と言つて居ります。が、丁度鬼が波の上を渡るやうに、さういふ人々は器用に世の中を渡つて居る、即ち己れを欺き、人を欺き、さうして最小の抵抗線、成べく行き易い道を通つて或は富豪とならう、或は高位高官に昇らうと言つて焦りに焦つて行くのである。左様にして成功して居るのを人々は成功者であると言つて褒めます。

るけれども、日蓮聖人の言葉を借りて申しますならば『愚人に譲めらるゝは第一の恥なり』、その恥辱と認めらるゝ所のものを以て名譽と考へて居るに外ならぬのである。是等の人々が死の關門に立つて、一たび自己の過ぎ來つた跡を顧みましたる際に、自ら成功であると考へた事は寧ろ人生の最大失敗であつたといふ事を味はざるを得ないのである。是等の恐れむべき人々を救はうと致しまするには、どうしても偉大なる宗教に依つて、さうしてその尊い所の生命に火を点じてやらなければならぬのである、一たび尊い生命に火が点せられ、それが烈火の如く燃え上り、白熱的に完全燃焼を起した際に、人間は初めて本當の人生の深みと、強さと、美しさを味ふことが出来る。佛教では之を『象が水を渡るに底に徹して而して行く』に譬へて居るのであります。

左様にして吾々にその宗教的情操が高調せられ佛と結びついて、そこに佛の内に於てのみ自己を認める『一心に佛を見たとまつらんと欲して自ら身命を惜まず』と經典に言つてありますが、現在の知識に於て是が我であると認める所のこの小さな我を一遍抛棄して、佛の中に於てのみ我を意識し、佛を離れては自分といふ者を考へることの出来ない迄に宗教的情操が高調せられて行きました際に、そこに本當の佛性が目を覺して参りまして、さうして吾々は佛に對して救はれて居るといふ所の實感を與へらるゝのであります。

この實感を得た時に吾々は法悦の境地に進むのである、この法悦の境地が段々に高調して参りました時分に結局日蓮大聖人の如く法悦三昧の境地に住して、如何なる威武の前に立つても、如何なる貧

賤の境地にあつてもそれに怖ぢず、恐れず、常に『よろこばし』と謳つてあの御一生の奮闘を御繼續になつたが如く、常に悦びの上に立つて而して人生の一切の苦を苦とせず、その上を堂々として渡る所の力を獲得するのである。地獄の火を以てしても焼くことの出来ない所のこの法悦こそ何物にも替へ難い眞の幸福であり、永遠の寶である。而して此幸福此法悦を我に與ふる所の教は又一切衆生を救ふ所の教で、此以上の正義はない。我等は自己の法悦を愛護しつゝ此正義の爲に奮闘するに至り、假令前面に失敗が豫期せられよふとも、それに恐るゝことなく正義と共に進み『たとひ乞食となるとも法華經をば傷け給ふべからず』といふやうな、正義に生き、正義と共に終始して行く所の剛健なる力を獲得することが出来るであらうと考へるのであります。

そこまで宗教が人間を教化して行かなければ、宗教の本當の力は現れて来ないと思ふのである。日蓮聖人の宗教は胡魔化しの安心ではない、本當に吾々の根本生命、佛性に向つて火を点する所の猛烈なる信仰であります。この信仰こそ現在の如く頽廢して居る人心、末法に於ける人心の根柢に火を点じて、さうして是等の人々をして眞に生きて行かせるものである、眞に是等の人々を救ふ所の力であると吾々は信する。少なくともこの一つの方針を逸せずして、さうして將來の宗教運動に従事して見たいと考へて居ります。

もう一つはこの世を濟ふといふ上に於きまして、吾々は世を濟ふにはどうしても國を救ふといふことを中心として考へて行かなければならぬといふことである。現在の吾々の社會といふものを考へて見ま

くといふことを、佛教はつきりと認めて教へて居ります。この点が現在の思想に於ては非常に混亂して居るやうに思ふのであります。

それが爲にこの國家といふもの、見方が非常に偏つて居る、國家は唯だ人間の生命、財産、權利を保護するものに過ぎないといふ風に考へて行つて居る。そこに個人主義の方からして爆彈が飛んで来るのであります。左様な淺薄な意味、偏つた意味に於て物を見た時には、必らず他から反對が起るにきまつて居る。古今に通じて謬らざる所の大道——或は之を名けて中道とも言ひ、吾々の言葉でいふならば即ち妙法でありませう——に立脚して現はれたる所の國家の理想、國家の目的であるならば、それに對して何にも反抗する餘地は無い筈でありますけれども、知識の文明、科學の知識を以て見た所のその國家觀

するならば、個人が集まつて家庭を造り、家庭が集まつて社會を拵へ、さうしてそれが國家の中に於て包まれ、國家といふ團結の力を以て國外の——即ち他の民族に相對して行く相でありするが、この点が現在に於ては甚だはつきりして居らないよふである。即ち是迄の文明に在つては、個人を中心にして世を濟はうと考へ、又現在は社會を中心にして世を濟はうと考へて行くのである。けれども彼の守護國界主權に説かれて居る池の喩の如く、その池の中に住んで居る魚族と池の水、これは即ち社會である、この池水と魚族を擁護して行くものは池の土堤である、その魚族の生活に必要な水といふものを絶さないやうにして行くのは即ち龍の働きである、龍は君主であり、土堤は即ち國家である。この國家といふものの内容に於てのみ社會が完全に育てられて行

といふものは、唯今申しますが如く非常に偏つたものである、非常に淺薄なるものである、茲に於てか一切の思想が國家に向つて刃を加へて來るのである。佛教では『群盲摸象』といふことを申します。象といふものは非常に大きなものである、吾々の目で見れば象の全体の形を見まして、さうして象は斯様な物であるといふことに就いて、目明きには何も議論はありませぬけれども、盲人が象の前に立つた時に、この象の全体を同時に押へて考へることは出来ない、象の尻尾に觸つた者は象は繩の如しと言ひ、脚に觸つた者は象は柱の如しと言ひ、耳に觸つた者は象は箕の如しと主張するでありませう。そこに各々が偏つた一角だけを捉へて行つた時に、思想の衝突と云ふものを免れない、現在の思想の混亂狀態は、即ちこの國家觀に於て、本當に確かりし

たものを持つて居らぬ所から生じて来る一切の禍ひであります。

個人主義は先づ以て之に向つて刃を加へて曰く、吾々の幸福を保全する所に國家の目的がなければならぬ、然るにやたらに外國と戦争を開いて吾々の血を流させたり、或は多額の税金を取り上げて吾々の生活を苦しめたり、國家が餘りにその力を逞うするといふ事は個人の幸福を保全する所以ではないといふので、十九世紀に現れた一切の國家學といふものは、悉く國家の手を縛り、足を縛らうとして居るのであります。或は國家は外交のみに關係すれば宜しいと稱へる者があり、或は國家は無賴の民のみを治めて行きさへすれば宜しいといふ事を主張する者があり、左様にして個人主義の方から國家に向つて爆弾が投せられる、さうして國家はヘタ／＼の目に

るからであると斯う考へる。國家が對立して各々の國民が自分の國を愛する爲に他の國を愛せない、さうして遂には人類が互に鎗を削つて戦ふといふ事になつて行くのは、即ち國家あるが爲であるといふ考へを持つて来る。又文藝の方からの思想は、文藝といふものは所謂人として——國民でなく、人としての感情思想を満足させるのが即ち文藝の本領であると考へる、さうしてそこに國家を超越すると稱して兎角國家を忘れるやふになる。又一方に於ては藝術は道德を超越すると唱へて、さうして國民道德などを忘れ、遂には之を輕侮して行く所の思想に迄陥るそこに國家といふものがやほり忘られるのである。左様にして現在に現はれて居る一切の思想といふものは、或は國家を忘れ、或は之を輕んじ、或は之を呪ふといふ所まで行つて、その結果として遂に思

遣つて居つたのである。現在は社會を中心としたる一切の思想が矢張り國家に向つて爆弾を投じて行く國家の罪惡面だけを見まして、國家が國家の名を以て犯し來つた罪惡は數ふるに遑がない、殊に現在社會主義の敵として居る所の資本主義、それを擁護して行く者は國家ではないか、斯様な國家に依つて文明の進歩すべき時機は既に過ぎて居る、將來は社會を中心にして、而して人道の上に立ち、人類愛を基調としてさうして平和の社會を造つて行かなければならぬ、人類共存共榮の實を擧げて行かなければならぬといふ事を主張する。そこに猛烈に國家に向つて爆弾が投せられて居るのであります。或は人道を唱へる所の人々は、人道といふものは一切の人類が互に相愛して行く所の大きな道德である、然るにこの人道の實現を妨げるものは國家が對立して居

想の論議を來し、非常な恐るべき所の思想が生れて来る譯であると考へるのであります。

吾々は先づ以て國を濟ふといふ考へを持つて、この一切の思想の覺醒を促して行かなければならぬ。さうして國を濟ふことに依つて家庭も社會も共に救はれる、國を濟ふことに依つて又國外の一切の人類他の民族をも救うて行くといふことが、是が最も大切な問題であると考へるのであります。日蓮聖人はこの點に於て實に明確なる教を吾々に遺して居られる、佛法の如きは實に文明中の最も高い所の文明であるが、國が亡び人が滅したならば、その佛法といふものも遂に擁護する所の力を失つて、跡形もなくなつてしまふものであるといふことを示されて居る『一切の大事の中に國の亡びるが第一の大事なり』と唱へ、さうしてこの國家の意味合といふものを非常

に強く教へて居らるゝのである。

今日の學者が唱へる所に依りますれば、學問やさういふものは國家とは關係を持たないやうに申しまするけれども、學者の唱へる所は物の平等面のみを見て居るのであつて、成程平等面だけを見れば宗教も國家とは關係が無い、倫理も國家とは關係が無い、藝術も文藝も皆國家とは關係がない事になりませうけれども、併ながら人生の實際問題に入つて行つた時に、假令學問と雖も國家と關係を持たずに進んで行く事は出来ないのである。例へば科學であつてもその科學といふものが國家と全く關係を持たぬかと申しますと、是は立派に關係を持つて居るのである。假に一つの例を取つて申しますならば、彼の東京驛前に在る所の郵船會社の建物、あれは亞米利加のフラーといふ博士がその建築學の粹を蒐め、建築技

發達する藝術は、例へば繪畫に就て申しますならば、殆ど墨線が何かでちよつと描いて、さうしてそこに本當にその境地に導かれる様な主觀的の味ひを與へるといふ所の特長を持つて居る。西洋の繪畫はゴテ／＼してさうして實際の有様を濃厚に描いたものが多い、そこに西洋の藝術の長所があるのでありませう。又音樂に就て申しても、西洋の樂器を連ねて四部合奏だの様々の事をやつて見せられる、或は又非常な名手の音樂を聴きましても吾々には心臓に大きな鼓動を與へないのである。之に反して月夜の晩に『忍路島』か何かを尺八で吹かれたとしたならば、連も書物などを讀んで居る氣にはなれない、書物を描いていつしか屋外に飛出して、自分がその尺八の中に這入つて居るのであるか、尺八が自分の身體の中で吹かれて居るのであるか分らないやうに

術の精を盡してさうしてあの七階の堂々たる建物を建てたのであると聞いて居りまするが、今度の震災に依つてどんな状態に陥つたか、諸君の御覧になつた通りやたらにX形の龜裂が澤山入つたてでありませう。之に依つて見ても日本には日本固有の建築といふものが、どうしても出来なければならぬ事は明かである、學問と雖も國家と關係を持たぬといふ事は言はせない。又藝術が國家と關係を持たぬといふやうな事を考へる人もありますが、私は藝術の事を深く了解しませぬけれども、日本の國民性といふものと西洋の國民性といふものは非常に違ふ、日本の國民性は恐ろしく主觀的に發達して居りまするし西洋の國民性は非常に客觀的に發達して居るのである。その異つた發達を遂げて居る國民性の者が、同じ一つの藝術に依つて満足しよう筈がない。日本に

恍惚として惹つけられて行くのは何であるか、即ち吾々の主觀性に満足と與へて行くのであります。私はこの間佐藤閣下から承りましたが、海軍の軍樂の方をやつて居る人の話に依ると、あの『松前追分』ナンといふ節は、連も西洋の樂器では合ふものではないといふ事である、それだけあの『松前追分』といふものは主觀的に發達をした事を證據立て、居ります。あれを一つ美しい聲で唄はれるといふと、如何にも海波渺茫たる所に乗り出して、さうして愛人と別れて行く所のその情緒といふものが吾々に味はされて行くのである。是でもまだ藝術は國家と關係が無いと言ふ人があるならば、それはよほど平等に偏したる、惡平等の思想であると言はなければならぬのである。一切のものは國家と關係を持つてそこに特殊の發達をして行くものである。

それ故に 先帝陛下は戊申詔書に於てこの意味を明に示されて居ります。現在各國が對立して居るのは互に争ふ爲ではない、各々その國の歴史、その國の國體、その國の國民性に依つて、その國の文化といふものを向上し、我が文化の長所を以て他の文化の短所を補ひ、他の文化の長所を採つて我が文化の内容を充實し、終には世界の最高の文化を建設して、さうして人類全體がその恵に浴さんければならぬといふ大原則を與へられて居るのではないか。さうしてそれが爲には内國運を發展して行かなければならぬといふ事をお示しになり、最後に「我が神聖なる祖宗の遺訓と我が光輝ある國史の成跡とは炳として日星の如し」、この神であらせられる所の皇祖皇宗の御遺訓には、古今に通じて謬らず、中外に施して悖らざる大道を含んで居る、それを中心にして發

達して來た日本の文化は歴史に成跡を遺し、その成跡は實に光を放つて居る、恰も太陽と星が世界各國一切の人類から仰き見らるゝ如く、日本のこの堂々たる精神文化は、世界列國の共に仰ぎ瞻るべき所の最高の價值を持つて居るものである。「寔に克く恪守し洋風の誠を輸さば」——本當にこの教に準據してさうした人心に根本の目覺を與へ、而してそれを實際の文化の上に實現する事に努力して行つたならば『國運發展の本近く斯に在り』と仰せられて居る。我が國運を發展するといふその根本の問題はこの教に違ふより外ないのである、遠く之を外國に求むる必要はない、近く我が三千年來傳來した所の傳統的のこの堂々たる精神文化の上に在るといふ事をお示しになつて居るのである。私共はこの固有の文化を尊重し、我が國體とさうして民族性に依つて特殊の發

達を遂げて來た所のこの文化の大精神を益々發揮し益々それを充實して行く事を以て、國民の本當の使命であるといふ事を自覺し、自ら自覺するのみならず之を一般民衆に自覺せしめて、而して古今に通じて謬らざる所の大道、之を精神としたる國家の理想に目覺め、國家の目的に目覺めしめて行きました際に、現在の思想の問題といふものは大部分片付いて行くであらうと信するのである。

日蓮聖人はこの點をはつきり言はれまして、さうして、この國體の尊嚴なる意味合を非常に讃歎せられ、非常に高張したる宗教的の情操を以てこの我が國家を讃歎して居られる。「八萬の國にも超えたる國ぞかし」と謂ひ、或はそれが爲に彼の有名なる三大誓願といふものも生れて來て居るのであります。一方に於て、佛教の中には色々高い理想を説いたものもあるけれども、世法即佛法、一切の文化をして最高の理想を以て活躍せしめようといふのが即ち法華

經の特色である。他のものは丁度雷さまが天上でゴロゴロ言つて居るやうなもので、圓覺經だとか般若經だとかいふものは高遠の理想を説いて居るけれども、それは天上の遠い所でゴロゴロ鳴つて居る雷さまのやうなもので、何にも人間には關係がない。又淨土の三部經の如きは遠く十萬億土に理想を持つて居りますけれども、それは支那のあたりでゴロゴロ言つて居る雷さまと同じやうなものである。この雷さまの虎の皮の褌を一つ押へて、そんな遠方の所に居るな、實際に處して大いに働けといつて働かした時に、これが電燈となり、これが電車ともなつて實際に働いて行くのである。この電燈となり電車となつて働いて行く所に法華經の偉い所があるのであります。法華經の教が政治の上に流れ、經濟の上に流れ、吾々の日常生活の上に流れ、而して社會組織の上に、一切の物の上に流れて行つた時に、その文化といふものは即ち妙法といふ絶對の境地から生

れて来たものである。神様の御精神、その古今に通じて謬らざる中道から生れて来た所の國體と、而して絶對の境地から生れて来たところの文化といふものは、それが衝突して行かう筈はない、そこに所謂法國冥合、自、先天的に合致して行く所の約束を持つて来るのである。そこに文化は本當の圓滿なる、總ての物をしてその所、得せしむるところの文化が出来上がる、その最高の文化こそ世界の一切の人類を救ふ所の眞の力となり眞の光となつて行かなければならぬ。日蓮聖人はこの点に大なる信念をお持ちになられました、「日は東より出で、西を照らす」と仰せられて居る。その日は東より出で、西を照らす所の大文化、その文化を建設し發達せしめんが爲に、日蓮聖人は「立正安國」の主張を掲げて、一代の御奮闘を御繼續になつて居るのであらうと思ふのである。私共はこの教に自ら目覺め、而してこの教を提げて國民を目覺めさせるといふ事は、取も置かず國を

濟ふ所以であつて、而してこの國を濟ふといふ事が總て又個人を救ひ、家庭を救ひ、社會を救ひ、而して國外一切の人類を救ふ所の根本となつて行かうと考へるのであります。洵に長時間御清聴を煩しました、この二點、即ち人を救ふといふ根本問題と、而して國を濟ふといふ根本問題を外れる事なく、吾々の將來の宗教運動を繼續して行きたいと私自身は考へて居ります。が、理想のみあつて而してその力は足らぬのでありますから、願くば皆様の御指導に依つて、私共の任務を完うせしめらるゝ事は、即ち私に對する恩恵であるのみならず、又私といふ小さな力を通じて皆様の御力の幾分の實現ともならうと考へます、何分將來とも宜しく御後援を願ふ次第であります。

うるの奥山今日こえて

本 多 日 生

それは實際佛教の根本精神に徹底さへすれば、その意味がよくわかつて来る。身を捨てゝこそ浮ぶ瀬もあれで、一旦人生といふものの、全部を見切をつけてしまつて、初めて佛法といふものは握る事が出来る、丁度お釋迦様が悉達太子として父母の國迦毘羅衛城を捨て、愛妻耶輸多羅姫を捨て、あらゆる名譽財寶、人間としての幸福を皆捨てゝ、單身山に入つて、自分の周圍には何も無いといふ所から、心の中に大悟徹底して、遂に一心法界に遁ねしといつて、全法界を我が物として、此の三界は皆これ我が有なり」といふ大悟徹底に達した所から、佛法といふものは来たのである。それをヨウ解説し切れない

で、小さな所から佛法に繋がらうとするが故に、誠にそこが厄介な事になる、一旦モウすべてを脱いでしまつて、體持も腰巻もサラリと取つて素つ裸になつてしまつて、さうして迦毘羅衛城を捨て給うた悉達太子の御精神、大悟徹底せられた成道初一念の所、最後眞實を説いた法華經の心髓に徹底して、そこから南無妙法蓮華經と出て来れば、さういふ下らない思想は起るべきものではない、それから又附たりとして息災延命を禱るも強ち悪いとは言はんけれどもこの卑屈な、有爲の奥山を越え損ねた人生觀の不徹底なものを一遍打ち破らんければ、何處まで行つても、本當の信仰に達する事は出来ない。思ひ切つて

それを捨てなければならぬ、さうしたからといって一日でも早く死ぬ譯ではないけれども、そこに死の刹那に在る事を一度考へなければならぬ、死は今に迫れりといふ事が、これが佛教の信仰に入る初一念になる、生死解脱の一念である。昔安海といふ偉い坊さんがあつて、それが支那の長安の都にやつて来た、すると大勢待ち構へた長安の人達が、寄つてたかつて安海法印に對して「あなたは、非常に佛法に精通せられた所の學僧であるといふ事を承つて居る、どうか善いお話をして戴きたい」といつて願つた所が、安海法印が言ふには「何も佛法に精通したからといって別に他の事はない、お前方が死ぬ事を忘るさへしなければ宜いのだ、それが佛法だ」と言つたといふ事がある、だからして人間は何時死ぬかわからぬといふ無常迅速、出づる息は入る息を待た

ぬといふ事を忘れぬやうにしなければならぬ。さう言つたからといって死ぬ積古をするのではないけれども、その死の刹那に迫れる事を見定めて、そこに恐れ、心や、悲しみに顛へ上るやうな氣分が起るものだから、それを無いやうにして置かなければならぬ。その恐怖の精神を撃退し得たところが佛法の信仰である、死は迫つて来た、モウ口は利けない、可愛い女房とも別れて行かなければならぬ、子供も置いて行かなければならぬ、あの事を……此の事を……と考へるとモウ……ッとして来る、その精神の中に置かれてそこをまごつかないやうに、畏れを懷かないで切り拓いて行く精神状態を、ふだん日頃いつでも持つて居る事が佛法の信仰である。だから佛教の信仰を練るといふ事は、死の刹那に迫つて居るといふ事、そこに考へを附ければ一番早い。出づる

息入る息を待たすといふ事は、遠い先の言葉ではない、それを自分の事にして考へなければいかぬ。これから家へ歸つて……と思ふから家の事が心配になるけれども、モウ家へは歸れない、この儘統一闇へ參詣をしてそこで急病でも起つて、だん／＼心臓が弱つてモウ五分間の後には冷たくなつてしまふといふ事を假定して、此處で題目を唱へて見ると、何もかも他のものは消えてしまつてたゞ信仰の悦びがそこへ一つ出て来る。その時有爲の奥山今日越えての意味合が考へられる、死が刹那に迫るといふ事がわからなければ、永遠に有爲の奥山は越えられない、その麓をまごついて居ると云ふ事になる。

それで日蓮聖人の經歷の尊いのは、この死が刻々に迫つて居るといふ事を幾度か現實にあらはして居るといふ點に在るのである。伊豆の伊東に流罪にな

つたといふものでも、たゞ普通に流し者になつたのではない、海中の孤岩、粗岩の上に置きざりにされたのであつて、激浪一たび脚を洗へば直ちにあの荒い海であるから浪に巻き込まれてしまふといふ事が、眼の前に迫つて居る、ベシヤリ／＼といふ岩に碎ける浪の音は、刻々に咽喉を締めるやうな譯である。その死の迫れる所に信仰の光をあらはして居られる又龍の口の頭の座の場合でもやはりその通りで、モウ太刀取が太刀を抜き放つてしまつて、實に一刹那に迫つて居る、只今なりと四條金吾が叫んだ位に、モウ一いきで首がゴロリと落ちる所まで行つて居るそこに立派な信仰の光をあらはされて居る。或は松葉ヶ谷の焼打の難でも、日蓮聖人がグッスリと熟睡をして居られるナといふ制限を見計つて、周圍から火をつけて焼打をした、定めし日蓮聖人は黒焦とな

つて現れると思つたところが、何處からかスーッと通れて居られた、併し考へて見れば實に危ない譯である、寢込を襲うて火を放つ、何の事はない、生きたがら家と共に火葬にされてしまふ所である。小松原の法難でもやはりその通り、聖人の通られるのを待伏をして居つて、不意に躍り出してヤツと斬りつけた、避ける暇も何もない、聖人御自身も眉間に三寸の疵を負はれたといふ位であるから、あれがモウ五分深かつたならば、鴈天を打ち割られて聖人はその儘切れてしまはれたものではあるまいか。その實に僅かな所で死に接近して居るところの光景、而もそこに信仰の光を放つて行かれた光景は、實に宗教の妙處、有爲の奥山今日越えての教を立てる手本として日蓮聖人がお働きになつたといふ事がよくわかるのである。

それからその意味を一切經に亘つて考へれば、大華嚴經に善財童子の菩提心を稱讃してある場合などは、皆その意味から佛教の發心といふものが起つて居る。その事は尙ほ詳しくお話しすれば能くわかるのであるけれども、餘り長くなるからそれは略して置くが、どうか諸君は、他は忘れても兎にも角にも「いろは」歌の「有爲の奥山今日越えて」のこの意味合を十分に御記憶になつて、掌を合せた度毎に「有爲の奥山今日越えてぢや、この信仰は有爲の奥山の麓を彷徨うて居る信仰ではない、この合掌禮拜の中に、有爲の奥山の迷の山を越えて、その向ふの京の都に達するところの信仰ぢや」といふことを考へなければならぬ。京の都は現在生活の上から不滅の我を見出して、首は飛んでも滅びないといふ永遠實在の自己を發見して、それが本佛と手を握り合うて間違ひ

を得せしむ。

と説かれ、又日蓮聖人の

先づ生誕を安んじて更に歿後を扶けん。

といふが如き聖訓、或は

極樂百年の修行は穢土一日の功に及ばず。

もなく滅びざる我が現れて行くといふ確信の下に、小さき我は諸行無常の風に誘はれて散り行くとも、有爲の奥山を越えて居る我は、不滅の京の都に達し得るといふよろこびに生きて、それが現在の光となり、力となり、眞に人生に幸福を齎し來り、それが爲には身體も達者になり、仕事も精出し、金も儲ける、顔の色がよくなるから女も惚れるといふやうな譯である。

さういふ順序に、精神の力を本にして一切を解釋して行くやうにならなければならぬ。大解脱の後に現在生活のよろこびを持ち來るのが、法華經に

未だ安んぜざる者は安んぜしめ、未だ涅槃せざる者には涅槃を得せしむ。

といひ、或は

皆苦を離れて安穩の樂、世間の樂及び涅槃の樂

を材料として「ウン此處だナ、南無妙法蓮華經」といふのでその嫌な氣分を逐ひ拂つてしまふ。それには人生はまことに試験の場所として工合が良い、いろ／＼の問題が起つて來るから「來たナ、これは好い試験の材料だ」といふ風にして考へて行けば、その煩惱なり煩さい事柄を皆な菩薩行の材料とする

ことが出来る。日蓮聖人は、いろいろの留難が起つて来なければ菩薩の行を成就することは出来ないと言はれて居る。留難——留めることは何であるか、いろいろの差し障りが出来て吾々の修行の邪魔をする、それを切り開いて行く上に於て菩薩の功徳を積めるのである。あまり幸福で、女房は親切、親達はやさしい、親類も皆よくして呉れる、商賣も繁昌するといふことになつたら、自分は馬鹿でも何でも通つて行く譯ぢや。それではまるで駐屯軍として戦地へ行つて居りながら、戦争は一つもしないで、司令官はじめ朝寝ばかりして、藝者買をして戻つて来るやうな譯であるから、さつぱりそれでは軍人の面目といふものは立たない。人生に處する以上は何れは面倒な事を豫想して行かなければならぬ、戦地に出陣する以上は相當強い敵が現れて来てもそれを粉砕し

て、美事帝國軍人の面目をあらはして見せようといふ、即ち腹が鳴つて出陣しなければいかぬ。どうぞ今度の出陣には敵が出て来ませんやうに、自分の受持方面は終ひまで一遍も弾丸などの飛んで来ませんやうに、さうして其の近邊にはうまい食物が澤山ありますやうに……といふやうな事を祈つて出陣する軍人はどつたらぬ者はない。日蓮主義者が現在に處するには、あまり生温かい生活を理想してはいかぬ如何なる事もありは来れよ、自分の信仰の力を以てこれを切り開いて行かう、結局はモウ命以上のものは無いのである、長いか短いか、人生の終りは死に到達して終りを告げる、最後の刹那に南無妙法蓮華經といふ聲と共に安らかに眠り得る信仰を握つて居る我は、如何なる強敵があらはれても決して敗軍することは無いといふ確信を以て、人生を送らな

ればいかぬ。

さう行けば必ずやそこに愉快といふものが現れて来る。普通人が苦しいと思ふ事、却つてそれが樂みに變つて来る、こちらの精神さへ強ければ世の中は決して左様に苦しみが多いものではない。雨なら雨がモットどん／＼降るといふことを考へて出かけるならば、今日の雨のやうなショボ／＼降つて居る雨くらの何でもない、どうせ降るならさかんに降れ、風も吹けといふので、そのつもりで身支度をして、いくら體が濡れてしまはうとも構はぬといふやうな用意で出かけさへしたならば、こんな雨ぐらゐ何でもありはしない。それを不用意に、少し曇つて居るけれどもまあ大丈夫だらうといふやうなことで、傘も持たずに草履ばかり何かで出かけるから、少しの雨でも「サア困つた」といふことになる。それは誠

に人生の生活を送る上に於てもそれと同じやうな關係があるのである、それで如何なる時でもちやんと身支度をして、足には長靴を穿き、身には合羽を着て、頭から雨がジャア／＼降つても傘などささないでも宜いやうな支度をして、さうして人生を渡つて行くといふのが日蓮主義者の態度である。さうして先に身支度をしてしまふと、思つたより雨が少いものである、道が悪いと言つても漸く泥が一寸ぐらゐのものである、満洲あたりへ行つて見ろ、一尺づつ、も泥がある、東京の道は悪いと言つても地盤が固いといふやうな譯で、少しも苦にならない。それを初めから泥など何も無いやうなつもりで出かけるから少しばかり道が悪くても直ぐへこ垂れてしまつて歩けないといふ事になる。これは誠に損な事ぢや、さうして一歩々々苦しまなければならぬ、長靴を穿い

て出なければ一歩々々威張つて歩ける。人生を左様
にたゞ平易な生活を豫想して出發するといふ事は愚
かな者のやることであるから、モウ少し力強い生活
をやつて見よう、あんまり強敵も現れて来んナ……
といふ所で、襲ひ来るところの人生の苦痛を撃破し
つゝ、最後は

立ちわたる身のうき雲もはれぬべし

妙の御法の鷺の山風

といふ生活の勝利を謳つて人生の終に達しなければ
ならない。

どうぞお互に日蓮主義を信する以上は、男も女も
今申したこの強い心懸けを忘れないやうにして行き
たいものぢやと思ふ。ところが今まではどうも女の
人の心がちと弱い、強くなれと言ふと男子を相手に
喧嘩する事のやうに思ふかも知らんけれども、さう

ではない。さういふ所は寧ろ優しくして、人生の苦
痛と闘ふといふ所にモツと勇氣強き生活を開いて、
亭主が弱つた顔をして歸つて来ても寧ろそれを歸ま
すやうにしなければいけない。丁度維摩居士の娘み
たやうに「お父さん何を蒼い顔をして居ますか」「イ
ヤ斯ういふ心配事があつてナ」「そんな事で心配する
事はないぢやありませんか、人間は正しき信仰と力
強き生活を開いて行けば天下恐れるものはありませ
ん、佛の教を信じて居る、而も維摩とも言はれるあ
なたが、それ位の事で蒼い顔をするといふのは怪し
からん事ぢやありませんか」といふ工合に娘にやら
れて親父が閉口したといふ話がある、あゝいふ工合
にやつて行きたいものである。優しい中に力強いも
のを持つて行きたい、又それは女にさういふ力があ
るのである、女には必ずさういふ男よりもより強い

所がある、女は單純であるが故に、善い所を打ち込
みさへしたならば、男のやうに難取な生活をしてない
家に居つて靜に物事を考へる事の出来る幸福を有し
て居る。男は難然として社會に交るが故に、その駆
引や、電車の音や何やかや、さういふ事で毎日神經
を疲らせなければならぬ、そこで憐れな有様になつ
て居る、頭腦がまことに紛亂して居る。女はちやん
と統一貫したる精神を守つて、家の内に落ついた
る生活をする事が出来る。丁度それは陸軍と海軍と
に於て思想の狀態が非常に違ふやうに、男は陸軍の
やうなものである、女は海軍の艦の生活みたいなも
のであるから、ちやんと本も讀める、思索も出来る
丁度陸軍の人と海軍の人を比べると、精神修養の上
には海軍の方がよほど幸福が多いやうに私は思
ふ、一定したる所に生活をして居る。男はなか／＼

忙しいから、會社へ行つても假令用が無いにしても
修養の本など讀んで居る暇が無い、又つまらぬ事で
電話がかゝつて来るとか、ガチャ／＼大した事でな
くても幾らも用事がある。女はそれに比べるとあま
り複雑な生活をしてない。この意味に於て男子がまご
つきかけた時分に、細君の方からしつかりなさいと
いふ事を信仰の上から教へる程に、日本の家庭をつ
くりたいものであると私は思ふ。それにはどうして
もこの『有爲の奥山今日越えて』といふ奥さんでな
ければいくまい、だから是れから嫁を貰ふにはこの
『いろは』歌を試験問題にして、『有爲の奥山今日越え
て』の意味のわからぬやうな者は嫁に貰はぬといふ
位に、一つしたいものだと思ひます。(完)

罷睡録 (二)

黃薇庵 青 村

三、強盜のお禮
廣い本堂の奥で曉の三時頃靜かに讀經せる恒順師の背後へ、寢音を忍んで近寄つた見上る計りの大男、覆面の間から異様に輝く眼光、手にせる白刃、言ふ迄もなく強盜である。『金を出せ』低い濁聲で斯う言ふより早く、白刃を恒順師の鼻先へ突きつけた、恒順は水晶の念珠で靜かに白刃を押しやつた、讀經の聲は少しも調子を變へない。強盜は自分の聲が坊主の耳へ這入らなかつたものと思ふて、瞥視と其邊を見廻して置いて、一段

高く『有金を出せッ』と又白刃を鼻先へ突きつけた、恒順は矢張り前の通りに念珠もて白刃を押しやつた。強盜は聊さか呆れ顔である、彼れの經驗によれば假令如何なる剛毅者でも、不意に背後から迫つて白刃を突きつけたら、必ず聲色があつて容易に彼れの目的は達せらるゝものである。此坊主の如く眼前に突きつけた白刃を枯薄ほごにも思はない者には彼は未だ出遇した事がない、盲人か盲人なら白刃を押しやる筈がない、聾者か或はそうかも知れぬ、夫にしても白

刃を押しやりながら相手の顔を仰いで見ない云ふのは、一體白痴か狂人か逆も正氣の人間には出来ない事だ。強盜は堅然たる中に斯んな事を考へた、凄文句で嚇かした手前、拍子ぬけのすること實に夥しい。其内恒順は讀經を終へた、經文を推し戴いて正しく經机の上に置き、暫らく合掌した後靜かに膝を斜に向けて『何用ぢや』と優しく尋ねた。『金を出せッ』ハ、ア金が欲しいか、金を貰ひに來たのかい、夫なら然うと物靜かに言へば分る、全體お前さんの其風體は何ぢや、日が照りつけると云ふではなし、風が吹けると云ふでも無いに、顔冠り杯して加之に人に物

を言ふに立ちほだかつて、何と云ふ不作法ぢや、『愚圖々々言はずに早く金を出せ』今出してやらうがマゝ愚僧の言ふ事を聞きなさい其白刃は一體何ぢや、そんな物騒なものを出すつて人に物を言ふ法はない、マゝそれを收めて其處に坐りなさい、『賊は既に到底此坊主には嚇かしは利かぬと見て取つて居たので、言はるゝ儘に白刃を收め其所へドッカと安座を掻いた。』夫から序でに其顔冠りを脱ぎなさい、人に金を貰ふのに冠り物をしたまゝと云ふ事はない、『これは取る譯に行かぬ』、『ハッハ……』是は愚僧が悪かつた、大の男が金を貰ひに來たのぢや、耻かしいいで

あらう如何にも尤の次第ぢや、して見るとお前さんは聊か耻を知る人間ぢや、未だ捨てたものでもない、夫では金が欲しいと云ふのぢやな、愚僧について來なさい。恒順は靜かに立て方丈に行く、賊は素直について行た、恒順は其所の用算司を指して、『其押斗を開けて見なさい、お前さんの欲しいと云ふ金が幾何でも這入てゐる筈ぢや、』賊は押斗を開けて在金全部を掴み出した。『是れ一寸待なさい、』『へエ』、『お前さん夫を皆持て行く積りかい、何と云ふ慾張た男ぢや、』『賊は裸ぐられた様な顔をした、顔冠りをして居なかつたら其顔付に恒順は噴き出したかも知ない。

泥棒を捕へて懲張つた男ぢや嘘と眞面目に言たのが、賊には可笑くて堪らなかつたのである。『みんな持て行かれては一寸差支へる事が有るのぢや、と云ふのは明日税金を納めねばならぬ、税金丈残して置いて貰いたい、』賊は紙幣四五枚を無難作に抜き出して、『是で宜いか』ア、それ丈あれば澤山、早く行け餘り草邊で、怪我をしなさんな』賊は其邊を見廻し狐鼠々々出て行た。『ア、一寸待ちなさい、』『へエ』、『お前さん何か忘れはせぬかな、』賊は腰の廻りを探つたり、懷ろに手をつき込んだりして、『イヤ別に何も……』、『忘れはせぬと言はし

やるのか、そんな事はない筈ぢや、人に金を貰つて置いて禮を云はぬと云ふ法は無からう、お禮を忘れたぢやないか、賊は此坊主條程變り者だと思ひ乍ら、歸りを急ぐので『どうも難有う』と云ふて逃げる様に立ち去つた『可愛想なものぢや、立派に耻を知て居ながら何に困つてあんな様子をやるのぢやう』恒順は斯う獨り言を言ひ乍ら又本堂の方へ行た、曉深い出来事で此事は誰も知らなかつた、恒順は無論誰にも語らなかつた。

夫から數日後の事である、博多の警察署から恒順に出現するやうにと呼出しが有た、何事だらうと行て見ると、署長殿殿しい顔をし

て『貴僧は盜難届を怠つて居るでせう』と詰問的に言つた、恒順は怪訝な顔をして『イエ別に盜難に罹つた覺は御座いませんからお届をする事も有ません』そんな事は無い、貴方の寺へ入つた賊がぢやんと揚つて居る、『ハテ不思議な事が有る者ぢや、愚僧の寺では賊に這入られた事は更に御座いません夫は何かの間違ぢや御座いませんか』署長は、物然として部下の巡查に命じて留置所から賊を引出させ恒順の御へ立せた、『此男の顔を御存知でせう、此奴の方では貴僧を能く知て居る、モウ逐一白狀に及んで居る』此男なら見覺が有る様で、そう、何日か金を貰ひ

に來たのは此男で『お黙りなさい貴僧は賊の罪を隠蔽して遣るお積りか知らぬが、夫は宜しくない、偽りの證言をするを偽證罪に問はれる事は貴僧も御存知でせう』『夫はよく存じて居りますが、此男は愚僧が承知の上で金を貰つて行た者に相違御座いません、何處の國に泥棒が禮を遣べるものが有ませう此男は愚僧から金を貰つて『どうも難有う』と立派に禮を遣べて立ち去りました、夫でも泥棒でありませうか。』

し、前記の趣旨を是認せらるゝの士女は、本計畫の達成に向つて何分の奉投を與へられんことを望む。

大正十三年四月二十二日

賛成者の主なる人達は左の諸氏である。
前内務大臣床次竹太郎、文部大臣江木千之、東京府知事宇佐美勝夫、東京市長永田秀次郎、協同會理事永井孝、檢事矢野龍、文部省宗教局長下村壽一、社會局長官池田宏、東京府内務部長藤永尊資、東京市社會教育課長大迫繁貴、族院議員木内重四郎、海軍中將佐藤藏太郎、子爵渡澤榮一、工業懇話會副會長山崎龜吉、陸軍少將小原正恒、海軍中將宮岡直記、文部省社會教育課長長杉嘉壽、社會局部長三矢宮松、警視廳保安部長佐井幸一郎。

顯本法華宗定期宗會

小石川白山の統合學林教會で開教費と教科書編纂費が新豫算に五月一日から五日間、小石川白山で第十二定期宗會が井村師を宗務總監に、國友師を宗會議長に、全國の選良を連れて開催された。そして珍らしい平和な空氣の裡に日程は進行

して行つた、右教區は朝鮮、臺灣、滿洲から博太方面へ擴大して、之に伴ふ開教費は新に豫算に計上された、右教師の爲の講習會費、布教の高等方策を決すべき布教師會合費、其他社會事業費等が主管の武田文學士と岡崎部長を信賴して多額に協賛された、又後進を養成すべき爲の教育に横つた多年の難問題も解決せんとして、新に教科書編纂の經費が設けられた、今、顯本法華宗は朝鮮の東海の天を壓せんとするの概があるのだ。

寺本堂建設の機動は滿場一致を以て即決され小作爭議の影響に苦む千葉縣を除いて、全國的に宗費を増徴すべく、増徴案が議員側から紳士的に提案された、宗務總監は破天荒だと思ふだが、破天荒の増徴案が滿場一致で可決さるゝ位、今、顯本法華宗は宗運が盛況して居るのだ。

上津具村本常寺の開堂入佛供養

海拔六千尺の峻路を視下の自働車は飛行機の様に飛ぶ

奇跡に更に奇跡を生む、歴々たる顯本の宗運は延びて深山の奥まで延びた、愛知縣の北海道と稱せられた北設上津具村に新に立正山本常寺が建てられて、今日、大正十三年四月二十五日、孝出度開堂供養の式典は開基本多日生親下に導かるべく、御釋迦様より、日

蓮聖人よりも遙に忙しい高僧を乗せた車は、峻路十數里、路は八字形に山から山に導かれて、丁度飛行機の様に自働車は進んだのであつた。

本常寺は開堂式の日、梵鐘も新調されて、梵鐘供養の盛典を挙げたのである、北設宗

の山林王片桐保次郎氏が着に歸宿し、發願して、人氣の立つた荷柄、突騷の間に一切は成就した、そして親トの車を迎へて、村旁から、永へに深山の奥の人達に、大聖經迦牟尼世尊の慈訓を傳ふべき大梵經は、美々しう裝ふた稚兒の少女の、新作の題目踊りを先導に、隨喜參加した村の在郷軍人と消防組とに牽かれて、一步步深山の奥の土に重い印象を残しつつ、行人原の本常寺へと進んだ。

午後二時、盛典は聞かれる。折柄中部日本を襲ふた低気圧の風を受けて、生憎の雨に、猿路を詣づる人の不便は、到底都人の想像を絶した所であつたが、然し新寺を創立する丈の熱誠を有する人達には、何の雨、何の風であらう、毫は滴りて濡れた。

山奥に建てられた本堂は、中京名古屋の新
習識に設計されたのである。理想と抱負とを
加味して、されば飽まで荘嚴に、飽まで清爽
に、飽まで深い情調に充ちた……本堂に大
聖御油牟尼世尊の應現在すと會かるゝ本常寺
の本堂は、今、本多日生親下によりて開堂入
養の儀禮を行はるゝのだ、大導師の咽喉から
微妙の梵音の聞えて来る、謹んで勧請し奉る
大恩教主御油牟尼世尊、教主御尊は立正山本

常寺に勧請されんとする、清涼の善男善女衆、
百の口からは囀題の聲が洩れて來た、嗚呼、
何等の尊嚴よ、何等の聖淨よ、こゝ娑婆世界
上津具村行人原に奉の寂光土は實現されんこ
するのだ。

式は進んだ、大導師から誓願文は言上され
た、風語に曰く、

證啓訓誨一章

諸奉勅開造國本法華經中常佳の一切の三寶
護法護國の諸天善神來臨影響悉地昭寛あらせ
たまへ。

伏惟我が僧教に五千七千の大藏經典を存し三國傳來三千年の歴史を有する世界最大の宗教なり、然り而して大藏經中最尊第一に位するは實に妙法華經是なり、能く此の妙法華經の本旨を光顯し佛教史上に異彩を放てるは我が立正大師日蓮上人是なり、其の立正大師の遺教の正統を奉持して正義の信仰を嚴守するものは我が顯本法華宗なり、釋尊最後の遺訓を拜するに正法を信するものは爪上の土の如く希なりと今愛知縣北設樂郡上津具村に於て正法有經の善男女皆謀り新寺を創立し立正山本常寺と稱す、各々清淨の喜捨を捧げて本堂其の徳を建立し工竣つて本日落成祝堂の式を舉

各地教信

を各方面より考察せられ、整束せられ、斷定されたのであつた。

又毎日午前中西高津蓮成寺で、顯本法華宗布教師の爲に、國友中川等六人の監督布教師を講師として、同宗の講習會が開かれ、最高義の講演があつた。

井村講師の「観心本尊抄精要」は、冷靜その物の如き講演であつた。

本多親下は、「一日道教學の統一せ歸趨に就て」と題し、「一總論を、教學の本質、門下の使命、時代の要求、先師の意見、教學の大観の五項に二、原理論を、法華經觀、本尊問題、修行問題、異論の解決、佛滅後の信仰體系統の概略、の五項に分ち、最初の提言に於て、本師が誤傳されざる様、並に先師先輩に致さるべき憚りなき批判に關し誤解されざる様に斷つて置いて、多年囑導せられた統一主義

神戸教報 三月廿八日午後一時より、武庫郡山田村原野澤久一方にて日蓮主義講演、「歌
舞のよろこび」國員渡邊義浩氏、「聖祖のたし
え」支部長熊井本光師。△全日午後七時より
同村公會堂に於て三ヶ村青年國員合同講演會
「猶太民族の活動と現代思想」國員渡邊義浩氏
「讀書と國體紀念」支部長熊井本光師。△國民
精神作興大講演會第五回 四月十日、取引所
組合、神戸市聯合青年團、青年團中央聯盟の
諸團體後援の下に共益俱樂部に就て開催。頗
ぶる盛會を極む。「開會の辭」縣會議員今井五
郎氏、「法定よりて國清めり」齋正輕月日堂師。
「讀書と誠實の徹底」大嶺正本多日生貌下。「閉
會の辭」支部長熊井本光師。

氏は本多親王に統一國の活動に共鳴せらるゝ所あり、將來其關係する取引所組合主體となり、或は統一國と聯合して大に思想界の爲めに盡されんます。

や延れ實に希有の大善功徳なり、各々の信念と丹精とは實踐するに堪たり、由來寺院は三寶を興隆し正法を宣傳するを以て目的とす、故に自今以後各々信念を堅固にして正法を擁護し五十圓轉願喜の功を積みて正法久しく昌へ教化遠近に及んで自他俱に安く以て立正安國皆歸妙法の祖願に寄與せんことを乃至法界同運利益

維時大正十三年四月廿五日

關本汪華宗管長

大綱正 日生稿首介介

の使命と、信徒の心得とに就て懇ろなる訓話があり、終つて、天童教十は榮に導かれて、創作の新寺建立の聖歌に和しつゝ舞踊した、都人には到底及ばぬ、雅びた、そして清いものであつた。

夜は松本監督布教師と加藤陸軍少將との談
演が開かれた。

大坂に開かれた
日蓮教學講習會

昨秋大阪に開かれる管の講習會が、西東京

神戶自慶會報 四月九日(時)午、三藝
藝製作所に於て、「精神生活」に就て「本多貌
下。△全日午後五時より、三菱造船所職工の
爲め、三石俱樂部にて、「開會の辭」造橋部長
徳大寺朝麿氏、「精神生活の意義」本多日生號
下△全月十日午後五時より神戶製鋼所にて「
讀書と精神生活」本多日生號下。

名古屋教報 特刊すべきは行學會の創立

である。各方面一流の人達が本を説下來名の機會、佛教の大綱と、日蓮教學の精要とを聴かうとするのだ。四月二十三日第一例会を開く、丹羽、駐本兩將軍、恒河名銀頭取、春日利三郎氏、多田、富田兩博士等、錚々たる者三十數氏、二宗教概論に關する講演は一時聞牛に亘りて靜かに講師の口から流れた。

緊張し切つた會合であつた。

自慶會は、三菱、車輛、豊田紡績、豊田織下、豊田押切、豊田機織、東洋紡績等の諸工場で本多親下と國友文學士によりて講演された。此の月新に開始したのは中京實業界の巨頭總定台名會社である。又日本車輛會社では創立以來の社員職工の死亡者五十幾名の爲に本多親下を大導師に、工場にうごくてらは

建てられ、莊嚴なる追悼會は営まれた、そして二千数百名の参列者は式後の講演を満腔して聴いたのであつた。

豊橋教報 三月三十一日服部家員講話△四月一日立正信託社統一國大法要△同夜立正青年團發會式「讀書奉讀」細谷忠男、君が代、「宗教」「綱領朗讀」服部源助、講演「精神作興の基準」野口權大前正、餘興チャップリン落語、△四月六日少年會△四月廿四日民風作興大講演會「信仰と生活の安定」丹羽少將、圖書を拜して「本多親下、聴衆堂外へ溢る。

因に税務署長及豊橋市長として十有二年豊橋に在勤せし細谷忠男氏は、天晴會創立當初より教團の爲め献身的に努力せられしが、今回郷里千葉縣に移住せらるゝ事となり、團員は四月二十日盛大なる饗宴を催し、二十四日一同停車場に見送りたり。

備前和氣 四月十五日赤松郡可美平松宅講演、「四法成就」原田日男△同十九日吉原村岡野作太郎宅にて、日本農民組合支部婦人會主催、「婦人の空費せる時間」南橋八、婦人の生計「原田日男△同二十日本成寺婦人會「鹿野に就て」原田日男△同二十一日同信會「本宗信仰の心得」原田日男△同廿三日日笠村青年

在郷軍人總會、小學校にて、青年五分間演説、優異青年三名表賞、「生活の安定」原田日男△同廿三日神根村上武八宅にて、「死生觀」原田日男△同廿八日天瀬村修養會、「虚空大の理想」原田日男。

京洛布教通信 三月八日、本正寺二衆會例會、感恩關係に就て「中島孝治氏、「建國の理想」萩原正△同十三日、國光婦人會、「信仰は力也」金光布教師△同十九日、本正寺後岸會、「法悦の生活と安心」土持其達師△同廿二日、久遠寺後岸會、「信あれば徳ある」金光布教師△同廿二日、米田家、「人生と信仰」豊田通泰師、「追善の意義」金光布教師。△四月八日、本正寺二衆會、「法華經を背誦として」豊田通泰師、「國民の覺醒」細野少將△同十四日、磯貝家、「誠信は清水珠の如し」金光布教師△同廿六日、米田家、「信仰に就て」豊田通泰師。「人生々活を法華經に求めよ」金光布教師。△三月廿四日、郡山金光寺、亡國の民となる勿れ」金光布教師。

千葉縣 上々大綱本國寺に於て四月十六日例年の通り朝日講開盤、午前九時半立正大師御更衣開眼供養、同十一時國講會堂に朝日講員大祈禱會及大震火災水陸懺死者の追善供養を嚴修す。午後一時説教、土屋山主、全二時半講演「佛敎は影なき影なり」木村義明師「讀書拜讀」三帆に及ぶ「中村日鏡師。午後七時、佛心とは若佐春治君。「信仰の飯粒」栗原布教師。「時弊革正、高貴布教師等、何れも熱語を揮ひ迷悟折衷正信鼓舞の講演は、満堂の聴衆感に打たれて靜謐し、中には隨喜の涙に咽びたる者もありき、講員一千名、其の他聴衆約五百名、饗宴地方に於ける旺盛を極めたり、餘興としては地方名物の歌舞等の催しあり老若男女の耳目を悦ばせたり。

長生郡長柄村廣福寺に於て、四月八日釋尊御降誕會慶修及婦人會講話、「櫻一貫」堀江會誠△同十二日題目講「信念の矢」堀江會誠。
金澤布教宣傳 三月廿日午後七時於本長寺、澤田布教立正大師に就て「澤田純榮師。「國民精神作興と宗教」川崎英昭師。聴衆百餘名△四月十四日午後七時半、於市公會堂、日蓮門下主催、國民精神作興大講演會「大國の形を拜して」本郷常次郎氏。聴衆千五百餘名△同廿二日午後三時、於本長寺、「本尊に就て」澤田純榮師。「法華經講義」本郷常次郎氏△同廿六日午後八時、於本長寺、天晴會講演「藥草喻品講義」、窪田純榮師。「大藏經講義」本郷常次郎氏△同廿八日午後三時、於本長寺、「本途二門の相違」石橋會章師、「開宗に就て」本郷常次郎氏。

廣告

日蓮宗法衣専門

諸種の準備が整ひましたから御注文品に就ては懇切町重に而も廉價で勉強いたし多年の御愛顧に酬るたう存じますどうぞ御用命を願ひます

東京市赤坂區一ツ木町八十六番地

柏屋 中山喜太郎

(市電)豊川稻荷前

廣告料値上げ

發行部数は激増しました、關東震災の爲に印刷が名古屋に移つてから丁度二倍になりました。で、廣告料を七月號から値上げします。

一頁 金拾五圓 半頁 金九圓 前納の事
表紙一頁 金貳拾圓 四分一頁 金五圓

價定一統	
一冊	金貳拾錢 送料五圓
半ケ年	金壹圓貳拾錢 送料共
一ケ年	金貳圓貳拾錢 送料共

大正十三年五月十七日印刷納本(第三百五十一號)
大正十三年六月一日發行

不許複製

編輯兼 國友 斌
印刷人 鈴木 雄

發行所

印刷所 名古屋市中區千種町五反田五二番地

編輯所

名古屋市中區東區田代町字城山七十七番地
電話名古屋一〇八八九番

大僧正本多日生師著

法華經自我偈講義

定價金貳拾錢
送料一部金貳錢

日蓮教學に重大なる病患あり、本尊の不鮮明と信仰の不純となり、或は萬有神教に等しく、或は庶物崇拜に墮り、或は縁祠迷信と異なるなし、法華に依經して眞言宗のふんどしかつづける者、日蓮の門弟子にして天台の糟粕なむる者、滔々弊風をなして遂に怪むなし矣、此の痼種を除去せずんば永く宗風宣揚の機會を逸せん也。本佛釋尊の久遠實成と十方應現とを顯して本尊の統歸を示し、一心欲見佛の至信を勸め、良醫良藥の慈訓を垂れて、純正なる信仰を説くもの法華經壽量品なり、經文の明鏡を規準として日蓮上人の遺文を拜せんに、釋然として會通する事を得ん。

日蓮上人以後六百幾十年、本多日生師によりて初めて本佛釋尊の御徳は遺憾なく光顯せられたり、本尊に關し、信仰に關し、一切の疑悔は氷釋せられたり、日蓮上人と日生師、日生師が明治大正の代に日蓮主義宣揚の功勳は古今稀なるも、特に日蓮教學の上に加へたる犀利なる明解は、眞に道を求むる者の爲に日月の巨煌に齊しからんか。

本書は本多日生師によりて法華經自我偈全文を講義せられたるもの、必ず一本を購ふて精讀せざるべからず、敢て大方に薦むるものなり。

大正十三年四月二十八日立教開宗之日

統一編輯局同人

特價割引

施本宣傳用に利用せらるゝ人の爲に、一は普く多數の購讀に便せんが爲め、一は統一誌宣傳の廣告費投資の意味に於て、特價拾部金壹圓(送料共)にて御需めに應ず。但六月廿日迄に豫約申込を乞ふ。

發行所

名古屋市東區田代町城山

統一編輯局

電話長東五四八七番
振替名古屋一〇八一九番

目次

法華經自我偈講義……………本多日生

次

日蓮主義より見たる無量義經……………井村日成
記事報導……………

第廿八年七月號

統一